

### 「言葉の楽譜」の奏で方

#### ■原則

- ・句読点、棒線はリズム作りのために存在している。

#### ■ルール

- ・読点「、」及び、句点「。」は休止符。
- ・棒線は、前の語と区切らず続ける（句読点よりも優先される）。

【例】 「今日は、いい天気」

「きょうはいいいてんき」と間をあけず、押すように発声する。

- ・「||」は、紙面が足りず改行せざるを得なかった印。表現は行をまたいで続いているので注意すること。

- ・重奏の際、次の語頭を置く位置に「→」が連動している場合もある。
- ・子音のみ聞いたら入る（**半角下げ**）箇所を見逃さないこと。

【例】

A 見つけた。

B 見えた。

Aの最後の「た||TA」のTを聞いたら、

Bは「見えた」と入る。

# idenshi195 朗読研究室

- 言葉の楽譜と声の未来 -

オンラインサロン  
特典テキスト 02

\* 本原稿の無断転載・複写・上演・放送を固く禁じます

朗読キネマ

登録商標第 6241074 号

言葉の楽譜

登録商標第 6232812 号



奏でる、言葉の楽譜。

idenshi195

● 一人語り

角川文庫『眼球綺譚』より

原作 綾辻行人  
脚本 高橋郁子

手塚

今夜も。また雨。  
見上げると、厚い雲の向こうに月明かりが滲んでいた。  
このところ毎日のように、日が暮れる頃から降りはじめ。  
九月も半ば。  
夜は肌寒さが混じるようになったが、雨はどこか生温かい。  
仕事を終えたわたしは、マンションに着くと、大きく傘を振るった。  
エントランスの床に飛び散る、水玉模様。  
構わず踏み越え、集合ポストへ向かう。  
ワンフロアに単身世帯が四部屋並ぶ、六階建て。  
四段目、中央の投函口に、  
湿気でふやけた大判の封筒が収まりきらずはみ出していた。

● 一人語り

倉橋

何年ぶりだろうか、この街に来るのは。  
駅舎から出た時、私は今更のようにそう思い、少なからぬ感慨にふけった。  
思春期の数年間を過ごした、山間の小さな街。  
秋の連休。昼下がり。  
駅前通りは、そこそこの賑わいを見せていた。  
街並みは随分と変わってしまった。  
年月がそうさせたのもあるだろう。  
しかし、それだけではない。  
今、日本中が奇妙な熱病に冒されているような、尋常ではない勢いの  
景気の波。  
それが、確かにここにも存在している。  
にもかかわらず、私は「静かな街」だと感じていた。

●二人語り

手塚 わたしは冷めたコーヒーに口をつける。

と、その時。 部屋の明かりが落ちた。

実 雨はまだ、 降り続けている――。

手塚 焦るわたしを笑うかのように、蛍光灯が不規則に明滅する。

脳裏をよぎる、 電気の接触？ Ⅱ

実 薄暗い共用廊下。 天井の明滅。

手塚 この雨で、どこかの電線がやられたのだろうか。

わたしは冊子をデスクに置くと、

カーテンの隙間から射す外の明かりを頼りに窓辺に向かった。

そう。街灯も信号機も他のマンションも。

明かりは点いていた。

実 エントランスの床に飛び散る、 水玉模様。

手塚 高鳴る、 鼓動。

実 構わず踏み越え、 集合ポストへ向かう。

手塚 ふと、 先ほど掴み損ねた違和感の正体

が気になった。

わたしはライティングデスクと背中合わせに置かれたベッドの枕元から、

非常用の懐中電灯を手を取った。

ワンフロアに単身世帯が四部屋並ぶ 六階建て。

落ち着いて 辿れ。

四段目 中央の投函口。

手塚 大判の封筒を 取り出した時の行動を。

実 封筒は収まりきらずはみ出した。

● 三人語り

倉橋 屋敷の庭は、あの頃よりもさらに荒れ果てていた。

実 生い茂る雑草、落ち葉の残骸、

倉橋 一步を踏みしめるごとに、多くの虫たちが音を立てて逃げ惑う。

美都子 もじゃもじゃお庭、 水たまり。

倉橋 洋館の脇、 水の枯れた池。

美都子 まあるいお月さま 沈んでる。

実 回り込んで、 裏庭。

倉橋 あった。

実 壊れた扉、 地下へ延びる階段。

倉橋 すべて、 昔のまま。

美都子 まって ママ。